

史料紹介

福田別所砂留(2)

田口 由実

前166号で、芦田町福田の「別所砂留」に関する弘化三年(一八四六)の史料と解説文を紹介したが、続いて天保十一年(一八四〇)の史料を紹介する。

解説された山名氏によれば、この文書は、天保十一年五月に洪水被害を受けた砂留を修復するため同年八月に修復工事の申請をした下書きではないかということであった。(五月の長雨による福山領の損毛は十一万九二二〇石、堤防決壊一三九〇箇所、流失家屋三三八戸、崩壊家屋二四〇戸、死者八二人) 解説を快く引き受けてくださった山名洋通氏、史料を探して提供してくださった国頭司郎氏に深く感謝申し上げます。

なお、この史料にある数字をわかりやすく表にまとめたものを参考までに下図に添付しておく。「切口長」は堤長のことであろう(上辺か下辺か?)、「上り」は斜面長のことか修復箇所のことであろうか。いずれ実

測して検討してみる必要があるだろう。また「凡人足」はおよその延べ必要人数である。

なお、文中に「先年、一郡寄の普請をした場所」とある。一郡寄で造成したのか、修築したのかは不明であるが、芦田郡全体から人足が徴集されたことがわかる。

別所砂留普請に関して、今後これよりさらに古い文書や他地域から文書が出て来る可能性もある。

新企画「進め!探検隊」では、現地ですら実際に切口長の長さを測ってみる予定です。参加希望者有り次第、企画発動します。メールでお申し込みを。

砂留	切口長	上り	人足
1番	8間 (14.6m)	4間 (7.3m)	109人
2番	13間 (23.7m)	15間 (27.3m)	975人
3番	14間 (25.5m)	14間 (25.5m)	980人
4番	—————	—————	—————
5番	—————	—————	—————
6番	6間 (11m)	2間 (3.6m)	80人
7番	16間 (29m)	2間 (3.6m)	160人
8番	7間 (12.3m)	3間 (5.5m)	150人
9番	7間 (12.3m)	7間 (12.3m)	245人
10番	4間 (7.3m)	3間 (5.5m)	60人
11番	3間 (5.5m)	2間 (3.6m)	32人
12番	—————	—————	—————
13番	10間 (18.2m)	12間 (22m)	600人
			合計 3391人

※( ) 内の数字は1間=1.82mで計算したおよその長さです

御尋申上候

中世石造物と石工集団について

166号掲載の岡田宏一郎氏の「御尋申上候」。中世石造物の五輪塔や宝篋印塔などを製作していた備後南部の石工集団や石工の棟梁について知りたいということでした。編集部に回答が寄せられることはなかったのですが、計らずも七月二十一日の佐藤聖聖氏の歴史講演会の中に少しその答えがあったように思います。

鎌倉後期の瀬戸内に冠たる名を残す大和系石工「心阿」、心阿に対置される重要な京都・近江系石工「念心」。そして、宝篋印塔の編年についてや、備後独特の様式など、多くのことが学べたと思います。

すべてが答えられたわけではないですが、石造物の研究はまだまだこれから。備後の石造物の第一人者が探訪の会から輩出されると良いですね。

(編集部では過去掲載の御尋申上候の回答随時募集中!)

乍恐以書附ヲ奉願上候御事

一 壹番砂留 切口長八間

凡人足百九人

上り四間右二而取繕

一 貳番砂留 切口長拾三間

凡人足九百七拾五人

上り拾五間右同断

一 三番砂留 切口長拾四間

凡人足九百八拾人

上り拾四間右普請

一 六番砂留 切口長六間

凡人足八拾人

上り式間右同断

一 七番砂留 切口長拾六間

凡人足百六拾人

上り式間右同断

一 八番砂留 切口長七間

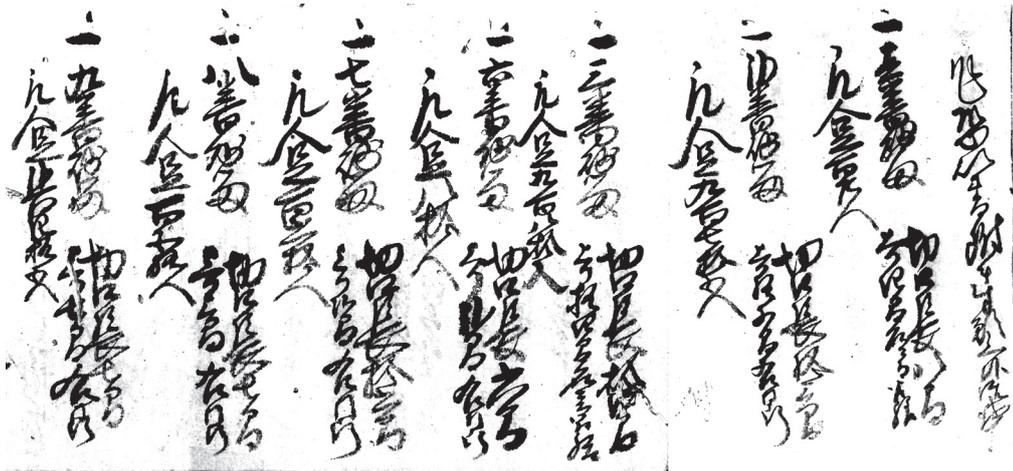
凡人足百五拾人

上り三間右同断

一 九番砂留 切口長七間

凡人足百四拾五人

上り七間右同断



一 十番砂留 切口長四間

凡人足六拾人

上り三間右同断

一 十一番砂留 切口長三間

凡人足三拾式人

上り式間右同断

一 十三番砂留 切口長拾間

凡人足六百人

上り拾式間右同断

拾ヶ所

右者先年一郡寄御普

請御場所当夏洪水二付

切損仕候処依下改仕寄

上申候以上 福田村組頭

栄治

子八月 同

八右衛門

同

四郎兵衛

同村庄屋

小野 大介

御代官様

